

与謝野晶子 訳

源氏物語

花宴卷



一冊堂青空文庫

源氏物語

花宴

紫式部

與謝野晶子訳

春の夜のもやにそひたる月ならん手枕

かしぬ我が仮ふしに

(晶子)

二月の二十幾日に紫宸殿ししんでんの桜の宴があつた。玉座の左右に中宮ちゅうぐうと皇太子の御見物の室が設けられた。弘徽殿こうきでんの女御にょごは藤壺ふじつばの宮が中宮になっておいでになることで、何かのおりごとに不快を感じるのであるが、催し事の見物は好きで、東宮席で陪観していた。日がよく晴れて青空の色、鳥の声も朗らかな氣のする南庭を見て親王方、高級官人をはじめめとして詩を作る人々は皆探韻たんいんをいただいて詩を作った。源氏は、

「春という字を賜わる」

と、自身の得る韻字いんじを披露ひろうしたが、その声がすでに人よりすぐれていた。次は頭中將とうのちゅうじょう

で、この順番を晴れがましく思うことであろうと見えたが、きわめて無難に得た韵字を告げた。声こゑづかいに貫目があると思われた。その他の人は臆おそしてしまつたようで、態度も声もものにならぬのが多かつた。地下じげの詩人はまして、帝も東宮も詩のよい作家で、またよい批評家でありになつたし、そのほかにもすぐれた詩才のある官人の多い時代であつたから、恥はかずかしくて、清い広庭に出て行くことが、ちよつとしたことなのであるが難事に思われた。博士はかせなどがみすばらしい風采ふうさいをしながらも場馴ばなれて進退するのにも御同情が寄つたりして、この御覧になる方々はおもしろく思召おもほしめされた。奏せられる音楽も特にすぐれた人たちが選ばれていた。春の永日ながびがようやく入り日の刻になるころ、春鶯囀しゅんおうてんの舞がおもしろく舞われた。源氏の紅葉賀もみじのがの青海波せいがいはの巧妙であつたことを忘れがたく思召おもほしめして、東宮が源氏へ挿かざしの花を下賜あそびして、ぜひこの舞に加わるようにと切望あそばされた。辞しがたくて、一振りゆるゆる袖そでを反かえす春鶯囀の一節を源氏も舞つたが、だれも追隨しがたい巧妙さはそれだけにも見えた。左大臣は恨めしいことも忘れて落涙していた。

「頭中将はどうしたか、早く出て舞わぬか」

次いでその仰せがあつて、柳花苑りゅうかえんという曲を、これは源氏のよりも長く、こんなこと

を予期して稽古がしてあったか上手じようずに舞った。それによつて中將は御衣ぎよういを賜わった。花の宴にこのことのあるのを珍しい光栄だと人々は見ていた。高級の官人もしまいには皆舞ったが、暗くなつてからは芸の巧拙こうせつがよくわからなくなった。詩の講ぜられる時にも源氏の作は簡単には済まなかつた。句ごとに讃美の声が起こるからである。博士たちもこれを非常によい作だと思つた。こんな時にもただただその人が光になっている源氏を、父君陛下がおろそかに思召すわけではない。中宮はすぐれた源氏の美貌がお目にとまるにつけても、東宮の母君の女御がどんな心でこの人を憎みうるものであらうと不思議に思いになり、そのあとではまたこんなふうに関心を持つのもよろしくない心であると思召した。

大かたに花の姿を見ましかばつゆも心のおかれましやは

こんな歌はだれにもお見せになるはずのものではないが、どうして伝わっているのであらうか。夜がふけてから南殿の宴は終わすまいつた。

公卿こうけいが皆退出するし、中宮と東宮はお住居すまいの御殿へお歸りになつて静かになつた。明

るい月が上つてきて、春の夜の御所の中が美しいものになっていった。酔いを帯びた源氏はこのままで宿直所^{とのじしよ}へはいるのが惜しくなった。殿上^{てんじやう}の役人たちももう寝^{やす}んでしまっているこんな夜ふけにもし中宮へ接近する機会を拾うことができたらと思つて、源氏は藤壺の御殿をそつとうかがつてみたが、女房を呼び出すような戸口も皆閉じてしまつてあつたので、歎息^{たんそく}しながら、なお物足りない心を満たしたいように弘徽殿の細殿の所へ歩み寄つてみた。三の口があいている。女御は宴会のあとそのまま宿直に上がつていたから、女房たちなどもここには少しよいいふうがうかがわれた。この戸口の奥にあるくるる戸もあいていて、そして人音がない。こうした不用心な時に男も女もあやまつた運命へ踏み込むものだと思つて源氏は静かに縁側へ上がつて中をのぞいた。だれももう寝てしまつたらしい。若々しく貴女らしい声で、「朧月夜^{おぼろつきよ}に似るものぞなき」と歌いながらこの戸口へ出て来る人があつた。源氏はうれしくて突然袖^{そで}をとらえた。女はこわいと思ふふうで、

「気味が悪い、だれ」

と言つたが、

「何もそんなこわいものではありませんよ」

と源氏は言つて、さらに、

深き夜の哀れを知るも入る月のおぼろげならぬ契りとぞ思ふ

とささやいた。抱いて行つた人を静かに一室へおろしてから三の口をしめた。この不謹慎なちんじやうしや闖入者にあきれている女の様子が柔らかに美しく感ぜられた。慄ふるえ声で、

「ここに知らぬ人が」

と言つていたが、

「私はもう皆に同意させてあるのだから、お呼びになつてもなんにもなりませんよ。静かに話しましょうよ」

この声に源氏であると知つて女は少し不気味でなくなった。困りながらも冷淡にしたくはないと女は思っている。源氏は酔い過ぎていたせいでこのままこの女と別れることを残念に思つたか、女も若々しい一方で抵抗をする力がなかったか、二人は陥るべきところへ落ちた。可憐かれんな相手に心の惹ひかれる源氏は、それからほどなく明けてゆく夜に別れを促されるのを苦しく思った。女はまして心を乱していた。

「ぜひ言ってください、だれであるかをね。どんなふうにして手紙を上げたらいいのか、これきりとはあなただっと思って思わないでしょう」

などと源氏が言う、

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば訪はじと思ふ

という様子にきわめて艶えんな所があつた。

「そう、私の言つたことはあなたのだれであるかを捜す努力を惜しんでいるように聞こえましたね」

と言つて、また、

「何れぞと露のやどりをわかむ間に小笹こささが原に風もこそ吹け

私との關係を迷惑にお思ひにならないのだったら、お隠しになる必要はないじゃありませんか。わざとわからなくするのですか」

と言ひ切らぬうちに、もう女房たちが起き出して女御を迎えに行く者、あちらから下がつて来る者などが廊下を通るので、落ち着いていられずに扇だけをあとのしるしに取替えて源氏はその室を出てしまった。

源氏の桐壺きりつぼには女房がおおぜいたから、主人が曉に帰った音に目をさました女もあるが、忍び歩きに好意を持たないで、

「いつもいつも、まあよくも続くものですね」

という意味を仲間ひづりで肱や手を突き合うことで言つて、寝入ったふうを装うていた。寢室にはいったが眠れない源氏であつた。美しい感じの人だつた。女御の妹たちであろうが、処女であつたから五の君か六の君に違いない。太宰帥だざいのみそつ親王の夫人や頭中将が愛しい四の君などは美人だと聞いたが、かえつてそれであつたらおもしろい恋を経験することになるのだろうが、六の君は東宮とうきゅうの後宮へ入れるはずだとか聞いていた、その人であつたら氣の毒なことになつたというべきである。幾人もある右大臣の娘のどの人であるかを知ることが困難なことであろう。もう逢うまいとは思わぬ様子であつた人が、なぜ手紙を往復させる方法について何ごとも教えなかつたのであろうなどとしきりに考えられるのも心が惹ひかれているといわねばならない。思いがけぬことの行なわれたについ

でも、藤壺^{ふじつぽ}にはいつもああした隙^{すき}がないと、昨夜の弘徽殿^{こうきでん}のつけこみやすかったことと比較^{ひかく}して主人^{あるじ}の女御^{によう}にいくぶんの軽蔑^{けいべつ}の念^{ねん}が起^{おこ}らないでもなかった。

この日は後宴^{ごえん}であった。終日^{しゅうじつ}そのことに携^{たづな}わつていて源氏はからだの閑暇^{ひま}がなかった。十三絃^{げん}の箏^{そう}の琴^{こと}の役^{やく}をこの日は勤めたのである。昨日の宴^{えん}よりも長閑^{のどか}な気分^{きぶん}に満ちていた。中宮は夜明けの時刻に南殿へおいでになったのである。弘徽殿の有明^{ありあけ}の月に別れた人はもう御所を出て行^いったであらうかなどと、源氏の心はそのほうへ飛^とんで行^いつていた。気のきいた良清^{よしきよ}や惟光^{これみつ}に命^{めい}じて見張^{みはり}らせておいたが、源氏が宿直所^{とのぐらひ}のほうへ歸^{かへ}ると、

「ただ今北の御門のほうに早くから来ていました車が皆人を乗せて出てまいるところでございますが、女御さん方の実家の人たちがそれぞれ行きます中に、四位少将、右中弁などが御前から下がつて来てついて行きますのが弘徽殿の実家の方々だと見受けました。ただ女房たちだけの乗ったのでないことはよく知れていまして、そんな車が三台ございました」

と報告をした。源氏は胸のとどろくのを覚えた。どんな方法によって何女^{なにじよ}であるかを知ればよいか、父の右大臣にその関係を知られて婿としてたいそうに待遇されるような

ことになって、それでいいことかどうか。その人の性格も何もまだよく知らないのであるから、結婚をしてしまうのは危険である、そうかといってこのまま関係が進展しないことにも堪えられない、どうすればいいのかとつくづく物思いをしながら源氏は寝ていた。姫君がどんなに寂しいことだろう、幾日も帰らないのであるからとかわいく二条の院の人を思いやつてもいた。取り替えてきた扇は、桜色の薄様を三重に張ったもので、地の濃い所に霞かすんだ月が描かいてあつて、下の流れにもその影が映してある。珍しくはないが貴女きじよの手に使い馴ならされた跡がなんとなく残っていた。「草の原をば」と言った時の美しい様子が目から去らない源氏は、

世に知らぬこちこそすれ有明の月の行方ゆくへを空にまがへて

と扇に書いておいた。

翌朝源氏は、左大臣家へ久しく行かないことも思われながら、二条の院の少女が気かりで、寄つてなだめておいてから行こうとして自邸のほうへ帰った。二、三日ぶりに見た最初の瞬間にも若紫の美しくなったことが感ぜられた。愛嬌あいきょうがあつて、そしてまた

凡人から見いだしがたい貴女らしさを多く備えていた。理想どおりに育て上げようとする源氏の好みにあつていくようである。教育にあたるのが男であるから、いくぶんおとなしさが少なくなりはせぬかと思われて、その点だけを源氏は危あやふんだ。この二、三日間に宮中であつたことを語つて聞かせたり、琴を教えたりなどして、日が暮れると源氏が出かけるのを、紫の女王は少女心に物足らず思つても、このごろは習慣づけられていて、無理に留めようなどとはしない。

左大臣家の源氏の夫人は例によつてすぐには出て来なかつた。いつまでも座に一人でいてつれづれな源氏は、夫人との間柄に一抹いちまつの寂しさを感じて、琴をかき鳴らしながら、「やはらかに寝ぬる夜はなくて」と歌つていた。左大臣が来て、花の宴のおもしろかつたことなどを源氏に話していた。

「私がこの年になるまで、四代の天子の宮廷を見てまいりましたが、今度ほどよい詩がたくさんできたり、音楽のほうの才人がそろつていたりしまして、寿命の延びる気がするようなおもしろさを味わわせていただいたことはありませんでした。ただ今は専門家に名人が多うございますからね、あなたなどは師匠の人選がよろしくてあのおできぶりだったのでしょう。老人までも舞つて出たい気がいたしましたよ」

「特に今度のために稽古けいこなどはしませんでした。ただ宮廷付きの中でのよい楽人に参考になることを教えてもらいなどしていただけです。何よりも頭中将の柳花苑りゅうかえんがみごとでした。話になって後世へ伝わる至芸だと思ったのですが、その上あなたがもし当代の礼讃らいさんに一手でも舞を見せてくださいましたら歴史上に残ってこの御代みよの誇りになったでしょうが」

こんな話をしていた。弁や中将も出て来て高欄に背中を押しつけながらまた熱心に器楽の合奏を始めた。

有明ありあけの君は短い夢のようなあの夜を心に思いながら、悩ましく日を送っていた。東宮の後宮へこの四月ごろはいることに親たちが決めているのが苦悶くもんの原因である。源氏もまったく何人なにびとであるかの見分けがつかなかったわけではなかったが、右大臣家の何女であるかがわからないことであつたし、自分へことさら好意を持たない弘徽殿の女御の一族に恋人を求めようと働きかけることは世間体せけんていのよろしくないことであろうとも躊躇ちゅうちよされて、煩悶はんもんを重ねているばかりであつた。

三月の二十日過ぎに右大臣は自邸で弓の勝負の催しをして、親王方をはじめ高官を多く招待した。藤花とうかの宴も続いて同じ日に行なわれることになっているのである。もう桜

の盛りは過ぎているのであるが、「ほかの散りなんあとに咲かまし」と教えられてあつたか二本だけよく咲いたのがあつた。新築して外孫の内親王方の裳着もぎに用いて、美しく装飾された客殿があつた。派手はでな邸やしきで何事も皆近代好みであつた。右大臣は源氏の君にも宮中で逢つた日に来会を申し入れたのであるが、その日に美貌の源氏が姿を見せないのを残念に思つて、息子むすこの四位少将を迎えに出した。

わが宿の花しなべての色ならば何かはさらに君を待たまし

右大臣から源氏へ贈つた歌である。源氏は御所うちにいた時で、帝みかどにこのことを申し上げた。

「得意なのだね」

帝はお笑いになつて、

「使いまでもよこしたのだから行つてやるがいい。孫の内親王たちのために将来兄として力になつてもらいたいと願つている大臣の家うちだから」

など仰せられた。ことに美しく装つて、ずっと日が暮れてから待たれて源氏が行つ

た。桜の色の支那錦しなにしきの直衣のうし、赤紫の下襲したかさねの裾すそを長く引いて、ほかの人は皆正装の袍ほうを着て出ている席へ、艶えんな宮様姿をした源氏が、多数の人に敬意を表されながらはいって行った。桜の花の美がこの時にわかに減じてしまったように思われた。音楽の遊びも済んでから、夜が少しふけた時分である。源氏は酒の酔いに悩むふうをしながらそつと席を立った。中央の寝殿しんでんに女一にょいちの宮みや、女三の宮が住んでおいでになるのであるが、その東の妻戸の口へ源氏はよりかかっていた。藤ふじはこの縁側と東の対の間の庭に咲いているので、格子は皆上げ渡されていた。御簾みすぎわには女房が並んでいた。その人たちの外へ出している袖口そでぐちの重なりようの大ぎようさは踏歌とうかの夜の見物席が思われた。今日などのことにつりあつたことではないと見て、趣味の洗練された藤壺辺のことがなつかしく源氏には思われた。

「苦しいのにしいられた酒で私は困っています。もつたいないことですがこちらの宮様にはかばっていただく縁故があると思いますから」

妻戸に添った御簾の下から上半身を少し源氏は中へ入れた。

「困ります。あなた様のような尊貴な御身分の方は親類の縁故などをおっしゃるものではございませんでしょう」

と言う女の様子には、重々しさはないが、ただの若い女房とは思われぬ品のよさと美しい感じのあるのを源氏は認めた。薰物たきものが煙いほどに焚たかれていて、この室内に起たち居いする女の衣摺きぬずれの音がはなやかなものに思われた。奥ゆかしいところは欠けて、派手はでな現代型の贅沢ぜいたくさが見えるのである。令嬢たちが見物のためにこの辺へ出ているので、妻戸がしめられてあつたものらしい。貴女きじよがこんな所へ出ているというようなことに賛意は表されなかったが、さすがに若い源氏としておもしろいことに思われた。この中のだれを恋人と見分けてよいのかと源氏の胸はとどろいた。「扇を取られてからき目を見る」(高麗人こまうどに帯を取られてからき目を見る)戯談じやうだんらしくこう言つて御簾に身を寄せていた。

「変わった高麗人こまうどなのね」

と言う一人は無関係な令嬢なのであろう。何も言わずに時々溜息ためいきの聞こえる人のいるほうへ源氏は寄つて行つて、几帳きちよう越しに手をとらえて、

「あづさ弓ゆみいるさの山にまどふかなほの見し月の影や見ゆると

なぜでしょう」

と当て推量に言うと、その人も感情をおさえかねたか、

心かたいる方なりませば弓張ゆみはりの月なき空に迷はましやは

と返辞をした。弘徽殿こうきでんの月夜に聞いたのと同じ声である。源氏はうれしくてならないのであるが。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
